

絆を映す刃

* 登場人物

村瀬貴則(13)

村瀬真希(35) 貴則の母

前田惣一郎(66) 貴則の祖父

前田小枝子(64) 貴則の祖母

佐々木雄太(13) 貴則の同級生

井上美奈(13)

斉藤真帆(13)

浜口孝平(28)

" " "

〈回想〉

村瀬浩則(45) 貴則の父

久永亜弥

SE—インターホンの呼び鈴

真希「ただいまー」

SE—もう一度呼び鈴

真希「誰もいないの？もう、今日帰るって手紙送ったはずなのに」

貴則「やっぱ『来るな』ってことなんじゃないの？勘当した娘が何の用だってー」

惣一郎「その通り」

真希「お父さん！やだ後ろからいきなりー、ああそっか畑よね、もちろん」

惣一郎「何しに来た」

真希「ほら貴則、おじいちゃんに挨拶は？」

貴則「ー初めまして」

真希「見て、13歳でもう私の身長追い越しちゃったのよ」

惣一郎「あいつもデカかったな」

貴則「あいつ？」

惣一郎「お前の親父だ！図体ばかりでかくて、ポツクリ逝きやがって」

真希「ーお香典、お心遣いいただきありがとうございます」

惣一郎「あれは母さんが勝手に俺の名前を出しただけだ」

真希「手紙で書いた通りなんだけど、私達もう東京で住むところが無いの。あの人の手術代や入院費で借金かさんじやつて・・・。駆け落ちして家を飛び出したのに、今更のこのこ帰ってくるなんて凶々しいのはわかってる。仕事が決まったら家賃も少しずつだけ入れるからー

ー。お願い、お父さん」

惣一郎「農家の家に帰ってきて、よそに働きに出るのか。ずいぶん勝手な話だな」

SE—扉の鍵が解かれ、扉が開く

小夜子「もうそれぐらいでいいんじゃないかい？」

真希「お母さん」

貴則「おばあちゃん！」

小夜子「貴則、久し振りだね。さあ早く上がんなさい」

貴則「でもー」

小夜子「本当はじいちゃん、貴則に会えるの楽しみにしてたんだから」

惣一郎「余計なことは言わんでいい」

小夜子「真希」

真希「ナニ？」

小夜子「アンタは家に上がる前に忘れてる事無いかい？」

真希「ーお父さん」

惣一郎「ーなんだ」

真希「今まで、本当にごめんなさい」

惣一郎「ー引越しの荷物、今朝届いたからお前の部屋に入れておいたぞ」

SE—ベッドに倒れ込む

真希「あー、人生の中で一番疲れた」

貴則「すげえ頑固ジジイ」

真希「これからも仲良くやってよ。長い付き合いになるんだからサ」

貴則「俺、東京帰りたい」

真希「あきらめなさい。あのまま東京にいたらアンタも学校行かないで働かなきゃならない羽目になるところだったんだから」

SE—部屋のドアをノック

真希「はーい」

小夜子「一息ついたら降りておいで。お茶入れたから」

真希「分かった」

貴則「ばあちゃんは東京まで会いに来てくれだし、優しく小遣いもくれるし大好き

なんだけどなあ」

真希「じいちゃんにもそのうち慣れるって」

貴則「だって俺嫌われてるだろう？父さんに似てるって、さつき言ってたし」

真希「じいちゃんにも似てるよ」

貴則「え？」

真希「頑固なところ」

貴則「ゲー、うそ、どん引きなんだけど」

SE—学校・ホームルーム開始のベル

浜口「紹介します、転校生の村瀬貴則くん」

貴則「よろしくお願いします」

SE—拍手

浜口「席は後ろの・・・あそこだ」

貴則「はい」

美奈「(ヒソヒソ)美奈のタイプだね。席は雄太の隣なワケ？」

SE—椅子を引く

雄太「俺、雄太ね、佐々木雄太」

貴則「よろしく、貴則でいいよ」

SE―休みの時間のベル

雄太「貴則、いいモノ見せてやるよー」

貴則「何？―石器？」

雄太「そう、俺ん家の畑から出たんだ。開拓団でこの町に来たじいちゃん、そのまじいちゃんが見つけたんだ」

貴則「すげえ、俺、本物なんて初めて見た」

雄太「そう簡単に見つかるモンじゃないんだ。この町の歴史的資料として代々受け継いでいかなきゃならない貴重なお宝なんだ」

美奈「だったら持ち歩いてみせびらかしてん

じゃねえよ」

雄太「うわ、出た」

真帆「人をバケモノみたいに言うな」

美奈「ウチらはこの貴則クンとしゃべりたい

んだから、雄太はあつち行つてろ」

雄太「(ゴソツと)貴則、気を付けて」

真帆「雄太の石器自慢に付き合うコト無いから」

貴則「どうして？」

真帆「小学校のとき、『総合学習の時間』であつたじゃん。ウチらそのとき『ふるさとを知る』とかナンとかの小冊子作ったの。その表紙を飾ったのがー」

美奈「あの石器。ウチらも初めは珍しがってたんだけど、もうアイツ調子に乗っちゃってサ、『俺のお守り、いや守護神だ』とか言っちゃって」

真帆「なんかムカつくよね」

貴則「でも悪い奴じゃ無いんだろ？」

美奈「根は良い奴」

真帆「褒めるんだ」

美奈「真帆は雄太のことからかい過ぎだよ。

ホントは雄太のこと好きなんじゃないの？」

真帆「ちよつとナニ言つてんの。貴則君の前

でバカじゃないの。ねえ、貴則君」

貴則「え、いや、俺知らない・・・」

(時間経過)

学級委員「起立」

浜口「えー以上で帰りのホームルームを終わります。が、この後持ち物検査をやるぞ」

クラス一同「(ブーイング)えー」

浜口「はい、カバン・ポケットの中の物全部

机の上に置きなさい」

SE―クラス中、私物を探り机上に置く

く

SE―ナイフが床に落ちる

貴則「あ・・・」

雄太「貴則、ナイフがー」

貴則「やべえ」

SE―浜口の近づく音

浜口「村瀬、このナイフは？」

貴則「いや、あの、ついうっかり・・・」

浜口「うっかりナイフがカバンの中に入って

いたのか？君は前の学校にもナイフを持って行つたのか？」

貴則「そうじゃなくて・・・」

雄太「先生、それ引越しの時に使つたらしいよ」

浜口「ナニ」

貴則「雄太・・・」

雄太「俺さつき聞いたモン。引越しのトラックの中で腹減つても、すぐにリンゴの皮むいてたべられるようにナイフ入れておいたつて。ーな？」

浜口「そうなのか」

雄太「俺も食いしん坊だから、その気持ちよ

くわかる、うん」

貴則「雄太」

雄太「でもさ、貴則」

貴則「え？」

雄太「リンゴはやっぱり丸かじりが一番美味いべ」

クラス一同、失笑。

浜口「と・・・とにかく、これは預かつてお

く

SE―靴音、行く

貴則「ありがとう」

雄太「さつき俺の石器見たとき、『すげえ』つて言ってくれたからな。俺嬉しかっただ」

貴則「雄太ー」

SE―電話の呼び出し音

惣一郎「はい前田ですー、はい村瀬貴則はウチの孫ですがー、えっ！ナイフを！？そうですか・・・面目ないーよく言ってる聞かせますのでーはい・・・はい・・・」

SE—電話を置く

惣一郎「なんていうことだ！」

SE—玄関扉が閉まる

惣一郎「貴則か？」

SE—階段を上がる足音

惣一郎「オイ！」

貴則「な、なに？」

惣一郎「学校から電話があつたぞ。お前、ナイフを持っていったそうだな」

貴則「え・・・ああ、あれは誤解なんだよ」

惣一郎「どう誤解なんだ。お前はナイフを持っていったのか、いなかったのか」

貴則「ー持っていったんだけど・・・でも、だからあれは」

惣一郎「言い訳するのか！お前はとんでもない奴だ！この不良め！」

貴則「ーうぜーよ」

惣一郎「なに・・・？」

貴則「不良だったらナンだってんだよ」

惣一郎「開き直るのか」

貴則「教えてやるよ、あのナイフはー北海道には熊がウロウロしてるって噂だから護身用に持ってたんだよ。これで満足か」

SE—階段を駆け足で上がる

惣一郎「ふ・・・ふざけるな」

SE—ドアを勢いよく閉める

BGM—部屋から漏れ聞こえる流行の音楽

SE—ドアをノック

真希「貴則、入るよ」

SE—ドアを開ける

BGM、大きくなる

貴則「勝手に入ってくるなよ」

SE—スイッチを切る

BGM—OFF

真希「ちゃんとノックしたよ」

貴則「ー母さんも怒りに来たの」

真希「母さんわかってるーあの時のナイフでしよう？」

貴則「ーうん」

真希「ずっと貴則が持ってたんだね」

貴則「カバンのポケットに入れて、ずっとそのままになってたんだ」

真希「ごめんね」

貴則「母さんのせいじゃないよ」

真希「明日学校に行つて、担任の先生に事情を説明してくる」

貴則「いいよ、別に。それよりもーもう嫌だ。東京に帰りたい」

真希「だからそれはー」

貴則「分かってるよ。でも、あのじいちゃんと一緒に生活していくのは俺には無理だ」

真希「話せばわかってくれるってー」

貴則「話そうとしたよ！でも全然聞こうともしない。ガミガミ怒鳴るばかりで・・・。俺の事気に入らないんだ。ナイフのことなんてただのきっかけで、ホントは俺にムカついてんだよ。でなきや、あんな言い方するワケない。もう顔も見たくない」

真希「じいちゃんもそうみたい」

貴則「え？」

真希「散歩に行つてるから、今のうちに下りてご飯食べなさい」

貴則「散歩？」

真希「自分が居たら貴則が来づらいだろうからって、しばらく帰つてこないわ」

貴則「じいちゃんがそんなことー」

真希「口に出して言つてないはいないけどね。いつの間にかフラーって出掛けて行つたの。言い過ぎたつて思つたときはいつも散歩」

貴則「なんでわかるの？」

真希「母さんが昔、じいちゃんと喧嘩した時もそうだった。逃げてるんだつて思つてたけど、ーそれが優しさだつて分かるまで13年も掛つちやつた」

貴則「そうなんだー」

真希「下でばあちゃんも待つてるから、早くおいで」

日替。

SE—引き戸をノック

SE—引き戸をノック

SE―職員室の引き戸を開ける

真希「失礼します。私・・・1年の村瀬貴則の母ですが・・・」

浜口「ご苦勞様ですーこちらへどうぞ」

SE―応接室のドアを閉める

真希「貴則が持っていたナイフはー果物ナイフですよ」

浜口「そうです。お母さん、ご存知なんですか？」

真希「はい・・・それは亡くなった主人が入院先で使っていた物でした」

浜口「ご主人の？」

真希「入院している時にはちよつとした刃物があったら何かと便利ですよ。ですからベッド脇の抽斗の中に入れて置いたんです。でもある時そのナイフでー」

回想

SE―点滴棒が倒れる

SE―食事の膳が床に落ちる

貴則「止める、父さん」

浩則「放せ！俺はもう治らないんだ。もうこれ以上生きていたら、お前達に迷惑がかかるだけだ！」

貴則「(泣きながら)そんなこと言わないで、お願いだから、一日でも長く生きてくれよ・・・」

浩則「(嗚咽)」

真希M「自分の命がもう長くないことを悟つ

た主人は、手元にあったナイフで発作的に自殺を図ろうとしてー。ちょうどその時見舞いに訪れた貴則が主人を抑えてなんとかその場は収まったんですがー」

回想終わり

真希「主人の側にナイフを置いてたらまた自殺するかもしれないからーって、貴則がずつとカバンに仕舞っておいたんです」

浜口「そうだったんですか・・・」

真希「主人、最後はもうナイフを握る力さえ残ってませんでした」

浜口「知らなかったこととはいえ、私は貴則君をそのー以前の学校でも何か問題を起こしたのではないかと疑ってしまいました。申し訳ない・・・。では、こちらのナイフはお返ししますのでー」

SE―ドタドタと廊下を走る

SE―勢い良く開くドア

美奈「先生！早く来て！」

浜口「コラ！来客中だぞ。まずはノック」

美奈「そんなことしてるヒマない！雄太が真帆を刺したの！」

SE―教室の引き戸を急いで開ける

雄太「・・・先生」

浜口「真帆、大丈夫か」

真帆「・・・痛いよ、雄太のバカ」

浜口「早く真帆を保健室へ。雄太、何があつ

たんだ」

雄太「だってあいつ、しつこいからー」

美奈「雄太と真帆、いつもみたいに石器のとでからかってー」

回想

真帆「雄太、そんなに石器が好きなら石器時代に生まれたら良かったのに」

雄太「ハハ、そうかもね」

真帆「でも、ソレってホント石器なの？アンタのじいさんがそこらの石を割って適当に作ったんじゃないの？」

雄太「ナンだって？もう一度言ってみろ」

貴則「雄太、止めるよ」

真帆「アタシガ本物かどうか見てやるから、ちよつと貸して」

雄太「イヤだ、触るな」

真帆「ニセモノだってバレるから貸したくないんでしょ」

雄太「これは本物だ」

真帆「だったらいいじゃん。貸しな」

雄太「イヤだ」

真帆「貸せつてツつてンだろ」

貴則「雄太！」

雄太「うるさい！！」

SE―肉に刺さる石器

真帆「ギャー！！」

回想終わり

雄太「ー気が付いたら、俺、真帆の腕刺し

てた・・・」

浜口「雄太、職員室に來い」

美奈「先生、なんで雄太の石器、学校に持ってくるの禁止しなかったの」

浜口「え」

美奈「だって、アレは昔の人が狩りとかに使ってた武器なんですよ。果物ナイフなんかよりずっと危ないじゃん。昨日の持ち物検査でも何も言わないでサ」

浜口「今はそんな議論をしている場合じゃない。行くぞ」

SE―閉まる引き戸

貴則「ちきしょう！」

美奈「貴則君」

貴則「俺、何も出来なかった。雄太は俺を助

けてくれたのに、俺は何もー」

美奈「しょうがないよ。貴則君は悪くない。

クラスのみんなだって、またいつものことだって思っただけだもん」

貴則「でもー」

美奈「アタシも今日の真帆、ちょっとしつこいなって感じてたんだけど止めなかったー。真帆はね、ホントは羨ましかったんだ。雄太のこと」

貴則「羨ましい？」

美奈「雄太のおじいちゃんは、雄太の事すごく可愛がついて、なんでも買ってくれりし、欲しいって言ったものはーそれが大事な家宝でも、なんでもくれるって」

貴則「へえ」

美奈「絵に描いたような『目に入れても痛くない孫』を体言してる雄太の、その象徴が石器だったの。真帆はずっと石器が目障りだったみたい」

貴則「どうして？」

美奈「真帆のおじいちゃんおばあちゃん全員、真帆が生まれる前に死んじゃってるから、孫として可愛がられた思い出が無いの」

貴則「ふーん」

美奈「ちよつとでも思い出があったら、あんな傷を負うこともなかったかもしれないのに」

SE―玄關扉を閉める

貴則「たごいま！」

真帆「おかえり。あの刺された子、大丈夫？」

貴則「なんで知ってるの？」

真希「今日学校に行ったんだもん」

貴則「ナンかー、何て言ったらいいのかわかんないけどー俺は刺したり刺されたりしないから」

真希「ヤダ何言ってるの、当たり前じゃない」

貴則「じいちゃんはドコ？」

真希「ーたぶん納屋だと思っただけ」

SE―道具の手入れをしている

貴則「じいちゃん」

SE―OFF

貴則「じいちゃん」

惣一郎「なんだ」

貴則「あの・・・何してるの？」

惣一郎「見たら分かるべ」

貴則「ああ・・・」

SE―再び道具の手入れする

SE―車が近付いて、停まる

SE―車のドアの開閉

貴則「先生」

浜口「おお、村瀬」

貴則「じいちゃん、担任の先生だよ」

惣一郎「担任の先生がわざわざ来るとは・・・」

貴則「俺、何もしてないよ」

浜口「これを渡しにね」

貴則「ナイフー」

浜口「お母さんがお見えだったのに、アノ事があったから挨拶もそこそこになっちゃったので、そのお詫びも兼ねて、ナ」

貴則「真帆ちゃん大丈夫？」

浜口「何針か縫ったけど、傷は浅かったから心配ないそうだ」

貴則「雄太は」

浜口「反省してるし、真帆も大袈裟にしたいって言うてるから、処分は無し。石器は今後学校に持ち込み禁止とした」

貴則「なんだソレ、変な規則」

惣一郎「貴則、学校の先生にそんな口の聞き方があるか、どうも先生、ウチの孫が大

変お世話になつております」

浜口「ああ、昨日はお電話で失礼しました」

惣一郎「貴則が悪ざした時は遠慮無く叱つてやつてください」

貴則「だから何もしてないって」

浜口「貴則くんは大丈夫です」

惣一郎「そうでしょうか」

浜口「ナイフの件は、後でお母さんから聞いてください。では、お母さんにちよつとご挨拶したいので」

SE―遠くで玄関扉を開ける気配

貴則「あのさ・・・」

惣一郎「なんだ」

貴則「俺、じいちゃんの事、まだよく知らないし、じいちゃんも俺の知らない事たくさんあると思う」

惣一郎「ああ・・・」

貴則「すげえ生意気な口利くようになってから出会ったから、今更ベタベタ甘えられないって言うかー」

惣一郎「何が言いたい」

貴則「だからー、そのー、どうやってじいちゃん孝行すれば良いのかサツパリ分からないけどー。ただ、俺、じいちゃんを悲しませるような事だけはしないから」

惣一郎「そうか」

貴則「それだけ言いに来た」

惣一郎「貴則」

貴則「なに？」

惣一郎「俺は何がじいちゃんらしいことなのかよく分からんが、当たり前人間としてお前と暮らしていく。そして、怒る時は怒る。猫可愛がりはいらないぞ」

貴則「うん。でも」

惣一郎「でもーなんだ」

貴則「たまには笑う時は笑って、褒める時は褒めてよ。当たり前人間としてね」

惣一郎「うう・・・ん」

貴則「頑固だな、じいちゃん」

惣一郎「なんだと」

貴則「ヤツパ似てるかな。俺も頑固の方が嬉しい？」

惣一郎「うう・・・ん」

貴則「まあいいや。先は長いし」

ME―エンディング

完